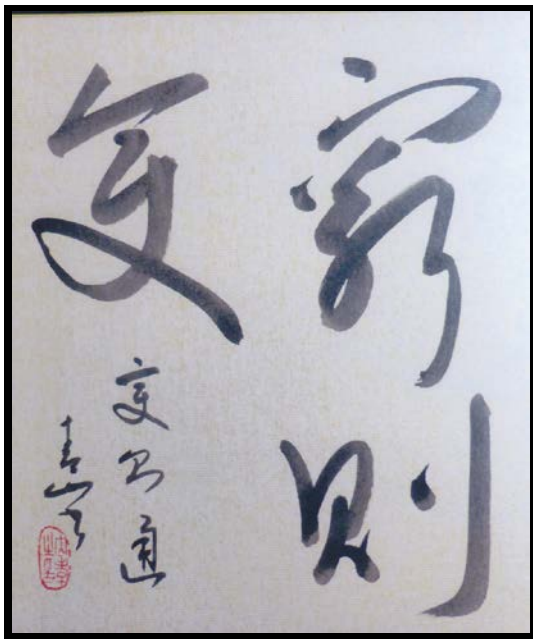


# 教職課程センターだより 第13号

発行日 2015年3月26日

## 心の教育

教職課程副センター長 大和田孝士



未成年者による殺人事件が気になる。記憶に新しいところでは、今年の1月名古屋大学理学部の女子大生が近所の主婦を殺害、昨年の7月には長崎県佐世保市で女子高生が同級生の女生徒を殺害している。もう少し遡ると、愛知県内でも、私自身大変な衝撃を受けた事件であるが、平成12年、豊川市で17歳の男子高校生による主婦殺害があった。いずれも「人を殺して解剖したい」「人を殺してみたい」という「殺人願望？」があったようである。しかもこれら3人はいわゆる優等生で、学業優秀な人達である。その他にも、未成年者の殺人犯罪事件はたくさんあり、マスコミに「酒鬼薔薇聖斗」の名で挑戦状を送りつけるなどし、世間を大きく震撼させた事件に神戸連続殺傷事件(H.9)がある。犯人は14歳の中学生であった。また、いじめによる中学生の殺害もあった。いじめもいつこうにならぬ。

いろいろな動機、原因等が挙げられている。一般的には、パーソナリティに問題があり、「精神障害」であるとか、「多重人格」であるとか、あるいは最近あまりいわれなくなったが、アスペルガー症候群などの発達障害者であるとかいわれている。

学校の成すべきことは、「学力を付けること」と「心を育てること」であるとか。自分自身長年学校現場で教育に携わってきて、自戒を込めているのだが、今の学校は「学力」は付けてくれるが、心の教育はどうなんだろうと考えざるを得ない。文部科学省は「道徳」の教科化を決めたようだが、その是非はともかく、どうも心の教育がなおざりになっているように思われてならない。難しい問題だが、学校の先生方はこの課題に真摯に取り組む必要がある。

一方大学においても、研究と教育の両方を行わなければならないという特殊性があるものの、やはり知識や技能を授けると同時に心の教育、あるいは社会性を伸ばさせる教育が必要なのではないか。教養期間を廃し、さらに理系教育に重きを置き、文系を少々軽んじる風潮が気がかりである。

古くさいかも知れないが、一昔前のような、友を大切に、父母を敬う、隣人と仲良くする、そして自他の命を大切にする。そんな心の教育を今一度見直す必要があるように思うのだが、。。。。。

掲載の文字は、「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」（易経）一何事も、窮すれば必ず変化が生じ、変化が起これば必ず通じる道が生じてくるものだー、の意。



## 「全人教育」の重要性—最終講義で考えたこと—

子ども発達学部 磯部 作 (人文地理学)

1月9日の最終講義の前日に、「全人教育」について話すようにと、キャリア開発の職員の方からの要請があった。それは、最近の卒業生は、企画力や対人関係能力などが充分でなく、トラブルを起こすこともあるためだと言う。「全人教育」とは人間性を全面的に発達させることを目的とする教育であり、1回の講義で到底できるものではないが、「地理学」の最終講義においてできるだけ努力した。

現代の社会は科学技術などが高度に発達し、専門分化が進んでおり、学問も細分化している。このため狭い範囲を深掘りはするが、全体を見通すことはむしろ弱まっている。地域や社会には様々な要素があるため、それらを総合的に把握するための力が必要である。

その力を身につけるには、幅広い学習と、自然体験や社会体験、多くの人との交流などが必要であり、大学においても、単に穴埋め式の知識を身に付けるのではなく、全体を考える力を身に付けなければならない。講義においても一方通行ではなく、学生が考えて議論などをすることが求められる。このため、講義の「義」は「議」にしなければと考えている。ゼミ活動やサークル活動、自治会活動、地域との交流、調査研究などに積極的に参加することが重要である。飲みニケーションなども必要であろう。

とりわけ、教師にとっては、教科とともに、総合学習や体験学習、父母や地域との連携、近年の社会的状況のなかで重要な課題となっている環境教育や防災教育などを行っていく力が必要である。学校教育においては学力が中心になり、教師にその力が必要であることは言うまでもないが、学ぶ主体である児童、生徒、学生も、また教師も人であるため、教育においては人間関係や信頼などが重要であり、「全人教育」が求められる。

私は、本学に赴任して19年、高校教員や岡山大学の非常勤講師を入れると、計42年間教員をしてきた。その間、多くの学生や生徒、教員や父母、地域の方々などに出会い、多くのことを学んできた。専門が地理学や社会科教育論だけに、日本のすべての都道府県や中国やイタリアなどに調査などに行くとともに、学校が立地する地域において地域の方々と良く交流し、「地域で、地域に、地域を学ぶ」ことを行ってきた。知多半島はその多くを海に囲まれ漁業が盛んなため、漁業者と「魚食普及料理交流会」なども実施し、多くの学生が参加して、おいしい魚を食べながら魚の料理の仕方や魚食文化をともに学んだ。

私自身、「全人教育」を充分行うことができる器ではないが、定時制高校や受験学力の低学力の高校などに長く勤務し、社会を支える様々な職業の人々などに接してきただけに、「全人教育」の必要性は痛感しており、今後とも努力をしていきたいと考えている。

教職課程の学生の皆さんや教職員の方々には大変お世話になり、多くのことを学ばせていただき有難うございました。教職課程のさらなる発展を祈念致します。



## 印象に残った思い出

子ども発達学部 松下 孜 (史学)

まさに「光陰矢のごとし」で、あっという間の七年間でした。最初の三年間は、無我夢中で、うまくいかなかったことも数多くありました。それでも少しずつ自分なりに講義を工夫したり、学生たちと話し合ったり、まわりの先生方に助けられたりして、だんだんと充実した日々を重ねることができました。ここで、印象に残った思い出をいくつか書いて、「お別れの言葉」とします。

まず、毎年行われる教友ゼミが中心となって実施されるフィールドワークです。京都・奈良方面へ行くことが多かったのですが、私にはお馴染みの見学地でしたが、ほとんどの学生たちには初めてでした。帰りのバスの中で学生たちが異口同音に言うのは「すばらしい文化財に出会うことができ、参加してよかった。」です。私自身も幾度も行ったことがある場所であり文化財であるのに、新しい発見があり、楽しい1日でした。これからも、ぜひ続けてほしいフィールドワークだと思います。

総合演習Ⅰ・Ⅱでは、「自然にふれてほしい」「この地方の文化財を知ってほしい」という思いから、前者では「春の竹の子ほり」「美浜の海岸での遊び」を行い、後者では「半田博物館・新美南吉記念館等の見学」「寺社の見学」等を行いました。さて、最近では大学の都会回帰が流行で、名古屋でもビルのご真ん中に新校舎を建てた大学が出てきました。そこでは全くといっていいほど自然はありません。自然のない中で四年間も過ごすしかない学生を哀れとは思いませんか。私にはどうても耐えられません。それに引替え自然豊かな日福大キャンパスは、私には天国にも思えます。後者の「寺社の見学」では、有名でもなんでもないごく普通の寺社にもすばらしい文化財が眠っていたり、地域の人々の温かい思いがこもっていたりすることを学生たちに見つけてほしいと願ってのことでした。全員ではありませんが、幾人かは私の思いが伝わったようで、いいレポートをまとめたり、発表をしたりしてくれました。

確か二年目が終り三年目に入ろうとする年に、三年生のゼミをもちたいという思いから募集の会で「ゼミの時間以外に土・日曜日に行く予定です。」と言ったところ、私のゼミに応募が一人もなく、成立しませんでした。あとから聞くと土・日曜日は、アルバイトをする学生が多く、その日に集まるのは「無理ですよ」ということでした。自分が学生の頃は、土・日曜日にフィールドワークは当たり前のことで、これこそが自分の力量を上げてくれたという思い出があるので、この現状にガックリした思いがあります。そこで翌年は、それは内緒で募集し、土・日のフィールドワークも学生たちの予定に合わせて行ないました。とくに、尾張藩以来の川祭りでも名高い「津島祭り」の見学をすることができました。また、「卒業旅行」で伊勢方面へ出かけましたが、「青峰さん」の山門の彫刻のすばらしさに、学生たちが気づき、盛んにシャッターを切っていました。「ああ、こういう文化財のよさ」に気づく学生に成長したのかと感動しました。

七年間、暖かく接して下さった皆様に感謝し、また皆様のご多幸をお祈りします。



## 合格体験記

2011年度 子ども発達学部心理臨床学科卒業 野出知里



1. 受験した自治体・・・滋賀県・特別支援教育《身体障害者枠での受験》
2. 特徴・・・第一次試験（課題作文・専門教養・適性検査）  
第二次試験（個人面接・模擬授業）
3. 受験対策

### ■課題作文■

論文の基本的な書き方（序論・本論・結論）を知った上で、滋賀県で出題されるパターン（字数・テーマに沿った書き方）に慣れ、自分の論文の形を作るように心がけました。毎回、恩師に添削してもらいながら、数をこなすようにしました。

### ■専門教養■

最初に過去問分析をし、志望する自治体の出題形式や出題傾向、問題の難易度などを確認し、何度も繰り返し解くようにしました。志望する自治体の過去問から、「今夏はこの時事問題がねらわれそう」など、出題を予想したり、間違ったところは必ず書き直し、自信をもって解答できるようにしておくことが大事だと思います。

### ■個人面接■

面接ノートを作り、どんな質問にも答えられるようにしていました。教育新聞を定期的に読み、普段から「今、教育現場で起きていること」に敏感にアンテナを張り、自分で考える習慣をつけていました。また、知っておくべき専門用語や大切なポイントを忘れないようにしていました。

### ■模擬授業■

先輩受験生から聞いた実施形式に従って練習を重ねていました。

4. 受験を通して得られた教訓

論作文や模擬授業は必ず誰かに見てもらい、自分の言動を客観的に捉えられるようにすることが大事だと思います。教育に対する先生の考え方や知識を教えてもらうことができたので、すごく貴重な時間となりました。また、「自分は、子どもにどんな力を身に付けさせたいのか」を明確にしておく、どんな質問にも答えられると思います。

5. 後輩へメッセージ

「私は絶対に教師になる！自分ならできる！」という気持ちを持ち続けることを大切にしてきました。受験直前には、「これだけ勉強したから合格できる！」という自信がわいてくるよう、準備をしていくことが大事だと思います。







## 卒業生からのたより

2011年度子ども発達学部子ども発達学科初等教育専修卒業 下山裕加里

私は日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科初等専修の1回生です。卒業後、一年間愛知県の小学校で常勤講師として働いていました。現在は採用試験に合格し、本採用されて2年目として知多半島内の小学校で5年生の担任をしています。

職場では忙しい毎日をおくっており、気づけばあっという間に一週間が過ぎてしまっています。学生の頃のゆっくりとした生活がたまに恋しくなることがあります。しかし毎日が刺激的で楽しいのもまた事実です。それは毎朝「おはようございます！」と元気な姿で教室に入ってくる児童と1日の始まりを迎えられるからだと思います。児童は毎日本当に元気で素直です。それが私のパワーの源ですね。

授業は毎日教材研究をして臨むようにしていますが、児童の考えは十人十色なので発問をしても自分が予想していなかった答えが返ってきたり、思いがけないところで質問をされたり、と自分の理想とする授業ができず反省の毎日です。

また、当然のことながら児童を指導する場面は本当に多くあります。学生の頃は授業と休み時間が子どもと関わる一番の時間だ！子どもたちには楽しく毎日を過ごしてもらいたい！と思っていました。しかし、それだけでは児童は育たないということを痛感しています。行事に対する指導、給食指導、学校生活での規律指導、など様々なところで集団行動の意識も育てなければいけません。叱るだけでは児童は萎縮してしまうだけだし、褒めるだけでは児童は自分の直さなければいけない部分に気づくことができません。自分の熱い思いを伝えようとしても上手く伝えられず、歯がゆい思いをするときもあります。どう指導すればいいのか分からず悩んだり、先輩の先生方に相談したりしながら私自身も教師として勉強中です。学生のたっぷり時間があるうちに是非考えてほしいことの一つです。

保護者との関わりも重要で、自分一人だけで学級を築いていると思っははいけません。懇談会や授業参観、電話でのやり取りや家庭訪問など、保護者と関わる機会があるときは保護者の意見を積極的に聞くことが大切です。保護者の子どもに対する思いを真摯に受け止めることで自分のやり方ではあの子は合わないんだなと気づかせてもらえることも多くあります。人様の子を毎日預かるというのは本当に重い責任があるということですね。

多忙すぎてストレスをためやすい職業かもしれませんが、自分のブレない軸(思い)を持って熱く働くこと、それが児童に伝わったときの喜びは計りしれません！それに、児童の知らない世界を伝えるときに、目をキラキラ輝かせて自分の話を聞いてくれる児童は本当に可愛いです。だからこそ時間がたくさんある今のうちに様々な経験をしてください。バイトでの苦労話や自分の子どもの頃の話、旅行先でのエピソード、などなど、何でもいいです。児童に自分の知ってる様々な世界観を教えてあげてください。教員採用試験の勉強だけに囚われず、吸収できることは何でも勉強して、経験してください！それが私の大学生活での後悔です。

いつか、大学の後輩である皆さんと一緒に働くことができるのを楽しみにしています！





私は、初任から3年間を肢体不自由特別支援学校、現在は知的障害特別支援学校に勤務しています。肢体不自由特別支援学校のゆったりとした雰囲気とは一変、知的障害特別支援学校では慌ただしく時間が流れる毎日を送っています。現在は中学部1年生の担任をしています。生徒は元気いっぱい、ケンカもしばしば…、毎日学校を楽しみに登校してくれています。もちろん悩むこともあります、生徒たちの様々な表情に日々癒されています。

#### ◇1年目の心構え

「3Kを大切に」これは1年目にある先生から言われた言葉です。3Kとは、「健康」「感謝」「謙虚」です。当たり前のことですが、改めて意識すると毎日がまた一味違うものになると思います。心身の「健康」は基本です!!同僚、生徒、保護者…関わる全ての人に「感謝」や「謙虚」の姿勢をもつことは、自分自身の学びの機会を広げ、新たな視点からの支援や指導方法の手掛かりにもなります。私は6年目の今もこの「3K」を心掛けています。

#### ◇授業・教材について

～肢体不自由特別支援学校にて～

重複学級では五感から働きかけることを意識して授業を考えます。どのような教材でも、色や形、固さ、質感、重さ、匂い、叩いた時の音など、素材そのものを味わうことから始めます。そして、それらを使いやすいように改良したり補助具を工夫したりして、子どもの体の動きを引き出しながら、制作活動や体験的な活動に取り組んでいます。

教科の授業では、教科書を使用して一斉授業を行います。学期ごとの考査もあります。そのため、実態に応じて個別の学習プリントや考査を準備します。文字や解答欄、プリントの大きさ、情報量などを調整しながら作成し、書くことが難しい場合はタブレットなどを使用しています。映像や替え歌を用いて関心をもって学習できるように工夫しています。

～知的障害特別支援学校にて～

視覚的な支援と繰り返しの指導を意識しています。見通しがもてるように文字やイラスト、写真でスケジュールや活動を示すこと、手本を示してイメージできるようにすること、構造化して学びやすい環境を整備することなど、より伝わりやすい方法を工夫しています。繰り返しでは、あいさつ、着替え、食事、排せつなどの生活習慣の中で大切なことを、毎日の生活で意図的に組み込み、併せて社会的なルールやマナーの指導を行うようにしています。また、机上学習だけでなく、例えば数学における買い物学習や計量の学習など、体験的な学習で経験を積み、実生活で活かせる力を育てていけることを心掛けています。

#### ◇おわりに…

どの校種においても、生徒の健康や安全の管理を怠らないこと、個々の実態をよく知り、個に応じた支援・指導の方法を考えていくことが必要です。また、支援をし過ぎず、「待つ」「見守る」という姿勢もとても大切です。時には厳しく指導にあたらなければならない場面もありますが、子ども達と同じ気持ちになって存分にはしゃぐ場面もあり、指導のメリハリをつけることが大切です。思いがけない出来事もあり、毎日がとても刺激的で楽しいです。子どもたちも皆さんのことを待っています!!ぜひ一緒に働きましょう!!



## 介護等体験レポート 子ども発達学部子ども発達学科 2年 加藤貴愛

私は、障害者支援施設で5日間、聾学校で2日間、計7日間の介護等体験を行ってきました。初めての実習で緊張もありましたが、普段講義を受けているだけでは知ることができない、現場での様々な経験をすることができました。

障害者支援施設で学んだことは「支援とは何でもかんでも手伝うことではない」ということです。私は何も考えず自分勝手な思い込みで、お風呂上がりの利用者さんの髪の毛を乾かしていました。そのお手伝いが支援だと思っていました。しかし、その利用者さんは自分で髪の毛を乾かすことができる方でした。できることは自分でやるというのがこの障害者支援施設の方針です。私は「お手伝いしなくてはい」という気持ちが強かったのではないかと思います。手伝うことが職員の仕事だし、支援だと思っていました。しかし、むやみやたらに手伝うことで利用者さんの筋力が減ったり、本来できたこともできなくなってしまう可能性もあることに気がつきました。画一的な対応だけでなく、それぞれの方に合った適切な支援を常に意識する必要があると感じました。

聾学校で学んだことは、「伝えようとする気持ちが大切」ということです。中学生の数学の授業を見学したとき、生徒の隣に座り問題の解き方を説明するという場面がありました。分かりやすいように説明しようと思い、手話や指文字、ジェスチャーを使いました。生徒からすればごちゃごちゃで分かりづらかったかもしれません。しかしその生徒は「分かった！分かった！ありがとう！」と手話で私に伝えてくれました。手話ができなかったり、うまくなくても、伝えようとする気持ちを持って相手に接することが大切だと実感しました。

この介護等体験を通して、人と関わる上で欠かせない「相手のことを理解する努力や自分のことを相手に伝える」ことの大切さを学ぶことができました。この実習がなければ、自分自身を見直すことも、多くのことに気がつくこともできなかったと思います。この2カ所での経験が、教員を目指す上でとても重要で有意義なものであったと実感するとともに、今後の学生生活を活かしていきたいと思っています。

## 合格体験発表会 子ども発達学部子ども発達学科初等教育専修 3年 尾上豪

私は、教員採用試験の合格者体験談を聞き、「教員採用試験はゴールではない」という言葉がとても印象に残り、心に響きました。私は今、夢である教師になるために、教員採用試験の勉強、面接練習を進めています。しかし、教師になること、採用試験に合格することを目的とした勉強、つまり試験対策のような勉強を進めてきてしまったように思います。たしかに、面接や集団面接の練習は教員採用試験対策として必要です。しかし、試験に合格するための正解を覚えて表現できるようにすることだけが大事なわけではありません。いじめがテーマだとすると、教師になった時、「自分だったら～」ということを考えて、



またいじめの構造、加害者の被害者性、暴力の連鎖など、いじめの見方そのものを鍛えるような学びをしていく必要があると思います。そうすることで、現場に出て、いじめがあった時、教員採用試験の準備期間で学んできたことが、いじめの解決に少しでも生かすことができるのではないかと思います。このように、大学での学びは、教師になった時の基盤となり、子どもの成長を手助けしていく上でとても重要なものです。これからは、先輩方が合格者体験談で話してくれたことを意識し、これから共に学んでいく仲間と、切磋琢磨し合い、私たちの教師になるという夢を叶え、その先にあるゴールに向けて頑張っていきたいと思っています。





「温」「幸」・・・私が日本福祉大学教育実践交流会に参加して、率直に浮かんだ漢字です。この一日で先輩方から様々な事を学びました。午前中は鎌田伸一先生に、教材・教具の工夫の仕方について学びました。目の前にいる子どもを「まるごと知る」ということの大切さを改めて感じました。そして、教材のすべてが手作りで、子どもへの愛情を感じました。たくさんの「！」を得たので、まずは教育実習から、そして今後の教員生活でこの気持ちと意欲を大切にしていきたいと強く感じました。

午後は卒業生による実践報告・討議でした。私は特別支援学校部会に参加しました。四人の先輩方(先生方)が大学時代に学んだ知識や経験をベースに「子どもを学校に合わせるのではなく、学校に子どもを合わせる」こと、ベテランの先生にたくさん聞いて吸収する、・・・そんな先輩方の輝いていて堂々としている背中を見て、私は「日本福祉大学で教職を学んでよかった」と、心から感じることができました。それと同時に先輩方の下で学ぶ子どもたちの幸せそうな顔が浮かびました。

福祉を学んだ者として、子どもの前にたつこと。それは子どもを本当に守り、育てる立場に立つこと。また福祉のわかる、実践できる教師を目指そうと感じました。

「日本福祉大学で教職を学んだ」という意味、それに加えて、心理学を学んだ私だからこそ出来る教育実践を、立場を大切にしていきたいと感じました。

とても有意義な時間で、まずは数ヶ月後の教育実習、そして教員採用試験が控えているので、この時のモチベーションを保ちつつ励みます。参加して本当によかったです。ありがとうございました！

## 今後の予定

### 【新2年生】

3月27日(金) 4限～5限 1251教室 教職課程オリエンテーション

3月23日(月)～28日(土) 17:00まで 課程登録期間

※上記オリエンテーションに出席後、課程履修費の納入及び課程登録を行ってください。

### 【新3年生】

4月16日(木) 3限 教職課程オリエンテーション(美浜)

※教育実習の意義・内容・関係書類手続きについてのオリエンテーションを行います。

### 【新4年生】

4月16日(木) 4限 教職課程オリエンテーション(美浜)

※教育実習にあたっての諸注意などのオリエンテーションを行います。

※教育実習直前指導については時間割を参照してください。

